様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２年　４　月　１　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　2007　～　2009
課題番号：１９５３０６９２
研究課題名（和文）　デューイの国際的教育文化理論の現代的意義に関する研究

研究課題名（英文）　A Study on the Significance of John Dewey' s Theory of International Education and Culture

研究代表者　早川　操（Misao Hayakawa）
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号：５０１８３５６２

研究成果の概要（和文）：
本研究では、ジョン・デューイの国際教育文化理論の特徴について解明するために、1920 年代を中心に彼が訪問した日本、中国、ソビエト・ロシア、トルコ、メキシコにおける教育文化社会に関する見解を考察することにより、アメリカ的民主主義教育理論の国際的な可能性と課題を明らかにした。その結果、彼の民主主義教育理論の根幹には、文化や伝統の違いはあってもそれぞれの共同体において人々が自発的で協働的な人間関係を構築するために協働的知性の役割が重要であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this research project is to clarify the significance of John Dewey's theory of international education and culture through the analysis of his writings on socio-cultural and educational observations conducted in Japan, China, Soviet Russia, Turkey and Mexico during the 1920's. In conclusion, it is proposed that the cooperative intelligence, which functions to construct face-to-face relationships in local communities of each country, plays a pivotal role in his democratic theory of education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学
キーワード：ジョン・デューイ、国際教育文化理論、協働的探究

１．研究開始当初の背景

本研究は、アメリカの教育学者ジョン・デューイの「国際教育文化理論」が 20 世紀前半を中心にどのように展開されてきたのか

について解明することにより、その後 20 世紀後半のアメリカ教育、とりわけ多文化教育や多文化社会の展開において、彼の教育的見解がどのように継承・評価されてきたかを探究する。このねらいに基づいて、近年における数多くの優れたデューイ研究の著作や論文のなかで、彼が展開した「国際教育文化の理論や視点」がどのように評価されているかについても検証する。

本研究は、20 世紀アメリカ教育において教育を考える原点となったジョン・デューイの国際教育文化理論の現代的意義と 20 世紀後半から現在にかけて展開されてきた多文化教育などに関する新たな理論の可能性について考察するものである。

デューイの研究は、アメリカにおいては、1980 年代後半から教育学だけでなく哲学や政治学においても彼の理論的可能性について再検討しようとする動きが見られる。

本研究の国内での位置づけの特徴は、個々に研究されてきたデューイの教育理論・政治論・文化論の諸成果を「実験主義的国際教育文化論」として包括的に統合することにある。

わが国では、近年、デューイ研究に関する新たな文献資料の紹介によって、彼の教育理論・道徳理論・政治論・文化論が詳細に研究されてきた。本研究は、原資料を調査するとともに、これらを包括的な観点から研究することにより、独自の「実験主義的国際教育文化論」を構築することをめざす。

これまで、応募者はデューイの教育理論の根底にある「協働的探究の論理」を研究してきたが、近年は彼の社会的政治的な理論や考察に焦点を当てて、彼の教育理論と社会・政治哲学との関連を探ろうとしてきた。それは、彼の教育理論が 20 世紀前半という社会的背景の影響を受け、さらにはアメリカ民主主義という政治的な背景に根ざしているという事実を無視しては考えられないからである。彼の教育理論は、みずからが展開した社会哲学、道徳哲学、政治論、文化論などと深くつながり、さらにはその芸術論や宗教論とも関連しているという仮説に基づき、彼が取り組んださまざまな社会的政治的問題に対する報告書、論文、書簡などを調査し解明してきた。

2．研究の目的

本研究の目的は、アメリカの教育学者ジョン・デューイの「国際教育文化理論」が 20 世紀前半を中心にしてどのように展開されてきたかを解明することにより、その後 20 世紀後半のアメリカ教育、とりわけ多文化教育や多文化社会の展開において、彼の教育的見解がどのように継承・評価されてきたかを探究することである。この目的に基づいて、近年における数多くの優れたデューイ研究の著作や論文のなかで、彼が展開した「国際教育文化理論」がどのように評価されているかについても検証する。

(1)本研究は、20 世紀アメリカ教育において教育を考える原点となったジョン・デューイの国際教育文化理論の現代的意義と 20 世紀後半から現在にかけて展開されてきた多文化教育などに関する新たな理論の可能性について考察するものである。

これまで、本研究者はデューイの教育理論の根底にある「協働的探究の論理」を研究してきたが、近年は彼の社会的政治的な理論や考察に焦点を当てて、彼の教育理論と社会・政治哲学との関連を探ろうとしてきた。それは、彼の教育理論が 20 世紀前半という社会的背景の影響を受け、さらにはアメリカ民主主義という政治的な背景に根ざしているという事実を無視しては考えられないからである。彼の教育理論は、みずからが展開した

社会哲学、道徳哲学、政治論、文化論などと深くつながり、さらにはその芸術論や宗教論とも関連しているという仮説に基づき、彼が取り組んださまざまな社会的政治的問題に対する報告書、論文、書簡などを調査し解明してきた。

(2)本研究では、これまで取り組んできたデューイのアメリカ教育や社会に関する研究をふまえて、さらに彼が体験した「異文化社会における教育や文化に関する理論や考察」について開拓する。それは、彼が構築したリベラルな教育理論が世界の多様な文化との接触交流を通じてどこまで通約可能であるかを問うことにもつながるからである。

(3)本研究の学術的な特色は、現代の多文化教育の源流ともいうべきデューイの「国際教育文化論」を考察することによって、最近のアメリカ教育理論で話題になっている「批判的教授学」や「越境教授学」の思想的系譜を解明し、現代の多文化主義的な視野のもとでの「実験主義的国際教育文化論」の意義を検証することにある。

本研究の意義は、これらの研究活動をつうじて、第一に、デューイの「国際教育文化論」の特徴を解明すること、第二に、それが彼の政治論・文化論・道徳哲学と関連していることを検証すること、第三に、わが国の現在の教育状況にも示唆を与える新たな「実験主義的国際教育文化論」を構築することにある。

3．研究の方法

研究方法としては、デューイの異文化における教育文化について書かれた著書・論文・報告書・書簡などの分析を、現代の多文化教育や批判的教授学の分析になかに位置づけることによって比較分析を行う。

(1)第一の具体的な分析方法としては、彼が日本と中国を訪問したときに書かれた諸論文・日記・書簡を中心にした東アジア教育文化論を事例として検討し、それらが彼の民主主義教育理論や国際教育文化論の展開にどのような影響を与えていったのか、それらは現代の多文化教育や批判的教授学とどのような点でつながるのか、などを検討する比較思想的アプローチを採用する。

(2)第二の具体的な分析方法としては、比較教育文化論的アプローチによって、1920年代や30年代のアメリカにおける異文化や多文化をめぐる教育理論と、現代の多文化主義教育や越境教授学との類似点や相違点について解明する。とりわけ、ポーランド移民の教育、トルコやソビエト・ロシア訪問の際に書かれたデューイの教育文化論などの具体的なケースを取り上げて、現代の多文化主義教育や越境教授学への示唆を考察する。

(3)最終的には、エスニシティ・階級・ジェンダーをめぐって展開されてきたデューイの多文化や異文化に対する見解を包括的に研究することにより、1910年代から1940年代にいたるまでに展開されてきた彼の実験主義的国際教育文化の総合的理論を構築することをめざす。この過程では、日本・中国・ロシア・トルコに関する教育文化論にみられるデューイのエスニシティ観・階級観・ジェンダー観などの具体的な事例分析を採用する。

4．研究成果

本研究の成果は、ジョン・デューイの国際教育文化理論の特徴について解明したことにより、1920年代を中心に彼が訪問した日本、中国、ソビエト・ロシア、トルコ、メキシコにおける教育文化社会に関する状況分析とそれぞれの課題について考察したことである。

それによって、各国の教育文化に関するあり方や可能性の特徴を検討し、デューイ自身

が立脚するアメリカ的民主主義教育理論がもつ国際性とともにその課題・限界などを明らかにした。

その結果、彼の民主主義教育理論の根幹には、文化や伝統の違いはあってもそれぞれの共同体における顔と顔をつき合わせた生活の中で、人々が自発的に協働しあって構築する関係のネットワークにおいて協働的知性を展開することが重要な役割をはたすことを解明した。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　6件）

① 早川操「20世紀初期メキシコ・トルコ・中国における学校教育の役割－デューイが見た革命的世界の学校・教育・文化－」『名古屋大学中等教育研究センター紀要』、第10号、2010年3月、 1－17頁、査読無

② 早川操「デューイの国際教育文化論に関する考察－デューイが見た 20 世紀初期ソビエトの革命的世界における近代化と教育－」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』、第56巻第2号、2010年3月、 67－78頁、査読無

③ 早川操「デューイによる日本のデモクラシー批判－1920年代の日中関係から見た日本の政治的文化的課題－」『日本デューイ学会紀要』第50号、2009年9月、75－84頁、査読有

④ 早川操「変動する社会における教育と人間像－ケアする人間を育てる教育－」『教育と医学』、No.665、2008年11月、4-12頁、査読無

⑤ 早川操「ジョン・デューイの日本観－実験主義的リベラリズムから見た 1920 年代初期の日本における民主主義の課題」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第54巻第2号、2008年3月、45-57頁、査読無

⑥ 早川操「デューイが見た異文化における人間と教育－1920年代初期デューイの中国観」『日本デューイ学会紀要』第48号、2007年10月、75－85頁、査読有

〔学会発表〕（計3件）

① 早川操「千葉命吉によるデューイ思想の受容と変容－デューイ教育理論の受容と批判から見た大正自由教育思想の課題の一側面－」日本デューイ学会第53回研究大会、椙山女学園大学、2009年10月3日。

② 早川操「デューイによる日本のデモクラシー批判－1920年代の日中関係から見た日本の政治的文化的課題－」日本デューイ学会第52回大会、筑波大学、2008年10月12日。

③ 早川操「デューイが見た20世紀初期の日本文化と教育」日本デューイ学会第51回大会、奈良女子大学、2007年10月20日。

〔図書〕（計　1件）

① 早川操「デューイの日本文化探究論再考－実験主義的リベラリズムから見た日本民主主義と文化の課題－」『日本のデューイ研究と 21 世紀の課題』世界思想社、2010年(採択決定)。

〔その他〕
ホームページ等
http://kenpro.mynu.jp:8001/Profiles/0002/0000284/profile.html

6．研究組織
(1)研究代表者
早川　操（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教授）

研究者番号：５０１８３５６２